

嬉泉の新聞

•嬉泉の新聞／第34号／1996年（平成8年）6月発行（年3回発行）
 •発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）
 TEL 03-3426-2323
 •発行人＝石井哲夫 •編集人＝友田 篤

知的障害者の福祉から学んで

京極高宣

福祉関係者にとって、おそらく周知のことと思われるが、私の専攻は、社会福祉政策の研究ということになっている。昭和50年4月以降、日本社会事業大学に専任講師として就任した当時は経済学の講義を担当していたが、前歴の経済研究所で経済関係のリサーチをやっていたことから、各種の行政調査や行政計画策定などに参加する機会が多くなり、かつ経済学が政策研究のバックボーンと比較的なりやすかったことから、次第に社会福祉政策、特に社会福祉計画に学問的関心を持つようになったわけである。ただ、意外と知らないことは、私が社会福祉の現場、とりわけ知的障害者の福祉からきわめて多くのことを学んで、政策計画の研究を進めてきたこと、いや少なくともそうしようと思ってきたことである。

ちなみに、私と石井哲夫先生との研究上のおつきあいは、お酒などの夜のおつきあいでないまじめな関係は、自閉症児のライフストーリー分析をつうじてであり、それは、石井哲夫先生の『受容による自閉症教育の実際』（学習研究社、1980年）にも、また拙著『現代福祉学の構図』（中央法規、1989年）にも掲載されているとおりである。当時、私は石井先生のご指導で、2メートルを優に越す関係文献と資料を読み破り、子どもの生活研究所の卒園生がその後、人間関係の形成能力と知的能力との両面でどう変化したかのアンケート調査をたんねんに分析し、石井モデルをそれなりに検証することができて、おおいに満

足した記憶がある。その後、縁あって精神薄弱者施設をしばしば見学する機会があり、他の福祉施設と異なり、施設待遇の格差がいかに彼らの生活の質と行動力の水準の向上に大きく影響するかをつぶさに知ることができた。そこで、当時の社会福祉調査会（今日の社会福祉振興・試験センター）のご助成で、日本社会事業大学にモデル精薄施設調査班をつくり、班員に飯田精一教授、阿部寛専任講師、村川浩一研究員（以上いずれも当時）をむかえ、東西の日本のモデル的施設20ヶ所を見学旅行した次第である。その成果は私にとっても大変大きく、その後、一方で施設措置費の全国調査を始めとする福祉経営学的研究につながると同時に、他方でよりよい待遇のための社会福祉政策の在り方の研究に波及していくと、今考えるとそう思われてくる。おそらく、今日までに精薄施設の見学は100ヶ所は越えているのではないか。

いずれにしても、私の社会福祉政策の研究にとって、精神薄弱者の施設から沢山のことを学んだし、ある意味では私の社会福祉政策研究の原点になっているような気がしている。現在、老人保健福祉審議会などで、どちらかというと高齢者福祉に仕事が集中しているキレイがないとはいえないが、歴史的事実としては、知的障害者への実践的取り組みと障害者自身から学ぶことがきわめて多かったということを証言しておく必要があろう。その意味で改めて石井先生に感謝したい気持ちである。

（日本社会事業大学学長）

社会福祉施設についての評判が悪くなつたといふ。社会福祉施設として、利用者が減つてきているのではなく、社会福祉施設に子どもや老人を預けたいという家族が増えている。しかし社会福祉施設が居住地に近い地域には出来にくくなつてゐる。通所施設の場合には、通所のための利便性から考えて、近くになければならないから、出来れば小規模で行き届く施設がよいのは、当然であるが、地域内では、数少ないものの施設は、広域性を持たなければ入所者が集まつてこない。そのために精神薄弱者更生施設においては、最近は、遠隔地に施設建設が行われている。

このような施設に入所することは、例外なく「島流し」とならざるを得ない。そこにもそれなりの人生があり、それが利用者として好ましい条件を作るものであれば、利用者が傷つけられやすい一般社会から隔離して保護することが必要という理屈も認められるであらうが、利用者にとって好ましい条件であるかどうかがそう簡単にわかるはずはない。もっぱら世話をする職員や家族たちの間で決められてしまうことになる。家族や、職員がどれだけ親身になつて世話を

をしてくれるかが問題なのである。家族たちと付き合つてみると、これはほんとうにピンからキリまであって、ひどい家族にいたつては、明らかに利用者に対する虐待に近い対応をしてきた事実を知らされることがある。一方、家族の訴えは、このよだな利用者を抱えていることでいかに被害を受けているかということであつて、これも放置してはおけない例も少なくない。

ただ今までの経験から言えれば、どうも、家族が自分やほかの家族

を利用者より優先させている傾向が強いことを感じている。家族も自分のぼるを出すことをするはずもないでの、実態が社会にわかりにくいのである。

一方、それ以上に困つた施設職員もいるのである。職員たちもいくら問題を指摘しても、自分たちから職員間の問題を俎上に載せたがらない。放つておけば虐待になりかねない施設処遇も多い。利用者を部屋に閉じこめてしまつたり、いやがる作業を強制したり罰を多

く与えたりすることを事細かに調

べてみると、このように直接処遇などのがれを出さない限り、取り

締まりのしようがないのである。そのため、相当はつきりと使い込みなどのがれを出さないのである。

その間たちの悪い保護者や職員ほど上手に自分の利点や主張を述べることが出来るので、行政は、

まんまとこのよだな加減な評判を信じ込んで、まじめで利用者に対するサービスに励んでいる施設を偏見を持って臨むことになる。

それでも長い年月にわたつてよくその施設を監視していればよく分かるはずであるが、一、二、三年ですぐに担当者が交代していくので誤った偏見を引き継ぎ事項として、長

年にわたつて真の正しい施設観察が出来にくくようにしている仕組みがあるといわねばならない。

どうしてこのよだな施設行政を行つてきた上に、更にこれを切り捨てて、新たに地域処遇という大問題を作り上げようとしているのであらうか。一体誰が責任を負つて、

地域処遇の大道を切り開いていくうとしているのであらうか。

今日、社会福祉施設が、行政や保護者とともに地域への関わりを積極的に開発することが急務であることをここで叫びたいのである。

施設経営の創造性

(その二十五) 石井哲夫

ていているということであろう。どう上を図ることが出来るかという課題に直面して、最近は、いかにしつて低資質の職員を採用しないようになっている。どうしてこのよだな施設行政を行つてきた上に、更にこれを切り捨てて、新たに地域処遇という大問題を作り上げようとしているのであらうか。一体誰が責任を負つて、

さて、このよだな施設を生かすから職員間の問題を俎上に載せたがらない。放つておけば虐待になりかねない施設処遇も多い。利用者を部屋に閉じこめてしまつたり、いやがる作業を強制したり罰を多くつきあう術を心得ていて、巧みに泳ぎ回つてゐる。何しろ忙しい

特別企画

今号の第一面にご寄稿下さいました、日本社会事業大学学長の京極高宣先生を代表発起人とされる「石井哲夫所長の福祉実践を励ます会」が、去る一月九日に開かれました。当日の所長の講義に対し「是非活字にして多くの人に伝えてほしい」という要請を参会された方々から頂戴し、今回特別企画として掲載することにしました。

私のお話したい」と

この会は、皆様が私を励まして下さるということですが、私としてはこの機会に皆様にお礼を申し上げたいという気持ちであります。私が社会福祉の教育に携わり、また、社会福祉実践に携わって来られたということととても幸せな人生を歩んで来たと思っています。本日用意しましたレジュメは、私が皆さんにお話をしたいということを思いつきましたが、世の中の流れが変わり、私たちは全ての人々が、その人なりの限界は書いてみたり、話をすると周囲の人から「難しくてわかりにくい」と言わることが多いわけとして、

そういう点では反省をしております。本日も二五分という短い時間でお話をということで、お聞きづらい点もあるうかと思いますが、お許し下さい。

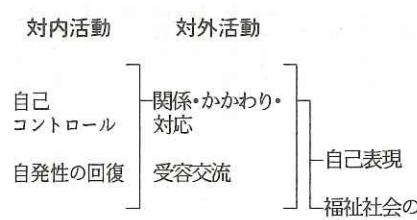
私は、青春を忠君愛国の戦時下で過ごしてまいりまして、世の中に尽くすとか沿うとか、とにかく世の中のために生きるということをまず、教え込まれたわけがあります。戦争が終わり世の中がガラリと変わってしまい、そういう意味では逆に世の中の方が人に尽くしてくれる時代になつたのではないかと思います。

社会福祉を国が真剣に取り上げるということは、そのことです。世の中というのは多数の健全な人たちという意味であります。その人たちが中心になって宮んじる世の中で、ともかく皆と同じように生活の出来ない人たちが存在しているわけであります。その人たちにもかく伸びびしても世の中に沿つていかなければならぬ、全くねばならないという求め方をしてきた過去がありますが、世の中の流れが変わり、私たちは全ての人々が、その人なりの限界は

けで、より良く生活出来るようにするということが私たちの社会の共同の責任であろうと思います。これが「福祉社会」といったことばで表してよいかわかりませんが、私なりに考へて、「福祉社会」というものはむしろ、お金が沢山あればいいというものではなくて、人々がそこでお互いに全くしあえるという社会であるということが望まれると思っています。

社会福祉を国が真剣に取り上げるということは、そのことです。世の中というのは多数の健全な人たちという意味であります。その人たちが中心になって宮んじる世の中で、ともかく皆と同じように生活の出来ない人たちが存在しているわけであります。その人たちにもかく伸びびしても世の中に沿つていかなければならぬ、全くねばならないという求め方をしてきた過去がありますが、世の中の流れが変わり、私たちは全ての人々が、その人なりの限界は

ここに簡単な図式を書いてみましたが、私たちは、一人ひとり人間として生まれてきて、そして自分で自己表現・福祉社会の形成



その目標は、「自己表現」という社会福祉の大きな価値と一致するわけでありますし、そのことによって福祉社会が形成されるというふうにかかわっていくという「交流」、これを「受容的交流」と名付けてその積極的な理論化と実践に努めてきたつもりです。

社会福祉は、利用者、援助者共々が自己実現を図るとともに、お互いに自己実現への援助をするということになります。その出発点はからだの不自由な方、心の不自由な方などという、言ってみればそこに援助が必要な状態を認めるこ

きていたいと思つてゐるわけで、その場合に、一人では生きられませんから、当然人とのかかわりといふものが出てきます。人との関係、人と関わって、人に対応していくというときに、お互いにどれだけ理解し合えるか、そしてまたお互いにどれだけ必要なかかわりが出来るか、これらのことを見ても、特に自閉症という人間関係の希薄な子どもたちと関わってきて、児童虐待がそこでお互いに全く理解する、受け入れるという「受容」と私たちがその人のためになるようにならなければなりません。それが「自己表現」という社会福祉の大いなる価値と一致するわけでありますし、そのことによつて福祉社会が形成されるということを信じてゐます。

とです。これは貧困とか或いは障害とか、高齢化ということによつてもたらされた生活の必要性といふもので援助が始まるわけです。これは先に申し上げたように、お互いに尽くし合うという、片方が一方的に尽くし、片方がそれの受け身になるというようなかたちではなくて、力が無く、また、お金が無いという人たちもお互いに尽くし合うということになると思います。

尽くしているそのことを、量的・客観的に測定するとか価値を決めると、いうのではなくて、人間が自分の人生を主体的に営んでいくときには、そこで自分だけでは得られない新しいものを人から得られるということが交流によって行われるのです。このことを、今申し上げました「お互に尽くし合う」ということばで表現をしました。

一、実践の歴史で考える、実践から学ぶ

学生の頃、上野で養護施設の非常勤の指導員として働いたこと、旭出學園の精神薄弱児教育の場をもつたこと、東京育成園で相談事業に携わったこと、日本社会事業大学で児童相談、社会福祉教育に

携わったこと、これら多くの中で私は多くの人に知り合い、また、その方々から教えられたわけです。が、何よりも自分自身がそこに入り込んで具体的に実践を行うことによって、私自身が体験をして変わってきたことがあります。例えば池の川幼稚園というところで、健常児のクラスと並行して障害児の保育を行っていく中で、幼稚園の先生方がもつものの考え方を体験することが出来ました。そして現在、日本保育協会、全国福井の児童相談所で河合隼雄さんと一緒に自閉症児のキャンプを担当したときにかなり苦労をいたしました。その時に河合さんと宿舎で同室二段ベッドの上下で色々と話し合ったりすることもできました。そして、前後しますが、子どもたちの指導を体験しました。そこでふれあつた援助者、教育者の方々、あるいは団体の方々とふれあうことによって、私自身がそこで自分自身の可能性というものについて様々に意味で反省をさせられたり、また、背伸びをさせられたということが成了ったと思います。

以上のような多くの体験の中で考へてきたことは、ひとりひとりの人間というものは、宇宙に例えてつくり、それを須藤現理事長の父である晃弘氏の援助により社会福祉法人嬉泉に発展させることができました。そこで平井信義先生などのお導きがあり、自閉症とめぐり会い、自閉症療育を経験することができたり、また、松島先生のご指導で全国養護施設協議会の方々と知り合うことができたり、そこで近江学園の糸賀先生とお話をすることもできました。

更に、日本社会事業大学では、大学行政にも携わらせていただき特に伊部英男先生にはたいへんにお世話になつたものです。こうして社会福祉教育の中でも学校連盟の活動というものも体験しました。そして現在、日本保育協会、全国自閉症者施設協議会といった団体関係の活動を体験しています。このように私が直接対面的に子どもたちの指導を体験しましたが、人の立場に立つて感じたり、考へるということを積極的に行わなければならぬ。心理学の分野でロジャースなどのカウンセリング理論、或いはモレノの心理劇理論といった先達が教えてくれる理論を実践の場で確かめたときに、文字ではわからない体験をしたのです。

それをことばで話しますと、「人に尽くす」ということに幸せがある」という陳腐なことばではあります。が、福祉では「尽くす」とは古くさいことであると考えている人が多いと思います。しかし、私が学んだことは「尽くす幸せ」の中に自分自身が育てられるとか、自分自身が変化させられるという、そのような幸せがあるのだという、自分が变化させられるといふこと。それが幸運です。そういう意味の実践体としての私の存在していると同時にまた、その一人ひとりの人生というものについては、簡単には「こうした方がいい」といったように教えられない」という選択の可能性をもつたものであるということです。このよ

われている自閉症にしても、素晴らしい色々なインパクトを与えてくれる存在であるし、また、実際に私と知り合っている保育者が人の子どもを抱えて育していくその気持ちの輝きの中に、子育てというもののもつてている非常に大きな社会的な使命というものを感じさせられるのです。

二、福祉臨床課題（数値のない価値観）

今日のこの短い時間の中では言い尽くせませんが、これらのいわゆる「実践の体感」というものを基本的に知ると、色々な理屈といふものが空虚になつてくるのです。このような言い方はよくないと思いますが、「素晴らしい理論」とか「閃きのあることば」とかやりとりをする中で理論的には負けてしまう人が世の中にはたくさんいます。しかし、社会福祉の実態をふまえて話をした場合に、意思の疎通できる人というのは限られています。そのような中で、吉川先生に特に感じることは、それほど深くお話をしたことがなくとも、そこに私と同じように病気を克服されて来られている中で、



待井和江先生から色々と教わりました。現在二三〇〇〇近くある保育所をほおっておくわけにいきません。また、幼稚園と同じようみなすわけにいきません。

社会福祉の第一線にある仲間としてこの人たちに託すことが大きいと思っています。そういう意味で一緒に仕事をしていきたいと思っています。

仲村優一先生は私にとって先輩

で色々な意味で刺激を与えて下さいましたし、日本におけるケースワークの立場を作つて来られた先生が日本の現実の行政の中で苦労されている様子を見て、私は多くきょうもおいでいたいでいる吉川先生に特に感じることは、それほど深くお話をしたことがない課題であると思います。「全く」「尽くされる」ということを

三、福祉政策の課題

現在の社会に失われているものと言えば、いわゆる人間関係のコミュニケーションであると思いません。そういう意味では、私たちが健全なコミュニケーションに属していないということがたいへんに大切な課題であると思います。「全く」「尽くされる」ということによつて、私たち障害児を正しく理解しようとか、或いはその障害児とよりよい関係をもつとうとするによって、私たち自身がよりよい人間になっていくことがあります。高齢者に対しても同じであります。自分たちが歳をとつていくわけですが、既に先輩が歳をとることで困つておられるという、その方々との関係で、自分がその人た

申し上げましたが、それは単に、地縁、血縁というものだけにとどまらないで、お互いに仕事、趣味のサークルを通して人の関係といふものを積極的につくり上げていく。いまは、地域ということにこだわりすぎているようですが、この人生の幸せというものはどうあればよいのかという立場から追求していく学問を選んだということに誇りをもつています。

待井和江先生から色々と教わりました。現在二三〇〇〇近くある保育所をほおっておくわけにいきません。また、幼稚園と同じようみなすわけにいきません。

社会福祉の第一線にある仲間としてこの人たちに託すことが大きいと思っています。そういう意味で一緒に仕事をしていきたいと思っています。

仲村優一先生は私にとって先輩で色々な意味で刺激を与えて下さいましたし、日本におけるケースワークの立場を作つて来られた先生が日本の現実の行政の中で苦労している様子を見て、私は多くきょうもおいでいたいでいる吉川先生に特に感じることは、それほど深くお話をしたことがない課題であると思います。「全く」「尽くされる」ということを

ことが、自分自身の開発に大きな意味があると考えております。

このような意味で現在の社会福祉とか教育の現場をみると、人間にかかわって援助を行い、人間が人間にかかわって援助を行うことの共通しているヒューマンケアワークという考え方についていきたい。

害というものはたいへんなんだ」という特別視することから始まつてきているわけで、何故、自閉症がたいへんなのか、自閉症に限らずどんな障害でもたいへんなのです。その場合に、この障害は特別にたいへんなんだということを考えて、それにはどうかかわっていくのかを考える必要があります。

また、高齢福祉の介護者の問題は、数を特に問題にしていますが、その量ということよりもむしろ、人が高齢者に援助を行う場合にどのような援助が必要なのかという点、そして、力をもつ援助者を

です。その意味で、私は介護と保育の関係をもつ研究者としてこれから的人生を歩んでいきたいと考えています。

児童福祉の政策において、少子化を心配し人口が少なくなっている経済性とか、高齢化社会における人口問題というとらえ方をしてしまいますが、国際的に日本を背負っていく子どもたちを育てることは、文化的な課題であると

これらのことと私は強調していく
す。また、障害福祉では障害の統
合化ということがあげられます。
これは、サービスの上で大事な方

四、福祉実践課題

社会福祉施設も新生の課題をもたなければならない。その積極性

理論から始まって、施設療育等をすすめできましたが、私たちが基本的に忘れてはならないものは、社会福祉にかかわるボランタリズムということことで、施設がそれを失いつつあるという現状であり、それをどうしたらよいかという問題です。社会福祉施設が民間性を強調する場合に、経営的な自由を確保するということをいわれていますが、そう単純に社会福祉施設が民間企業のような、利潤追求とか投資効果を得るわけにはいかないのです。設備投資をすればするほど、赤字が増えてくるという状況も聞いておられます。そのような時にもう一段深めていき、民間社会福祉施設のあり方の問題として、そこで発生する仲間との関係、つまり、施設の建物ではなくて、その施設に集う人たちの力というものを集めるという意味の再生課題があると考えます。力を結集するということで、私の好きなことばとして「施設というのは、人間の善意と工夫の集積である」というべき山内局長のことばがあります。私はこういう発想を持ち続けたいと思います。

官庁の方々とおつき合いをして、今の日本の行政の方々のもつ政策的な意欲とか能力について信頼しています。また、現場の人たちは社会から批判等も受けていますが、私は仲間として親愛の気持ちをもつっています。

私も六八歳を越えました。大きな病気もいたしましたが、この後の人生を考えた場合、社会福祉の実践というものは人間関係の重視しかないと考えます。きょう、これだけの方々が私のために集まつて下さいました。そのおひとりお一人の気持ちを受け取ったちは働くことが出来る、どうにでも働けるのではないかと考えられます。また、この社会福祉の仕事は教育の仕事も同じですが、善意の仕事であり、働けば働くだけ、それだけいただけるものもあるという、いわゆる徳目を誕生させる創造のしごととしてかつ実践的な存在として位置づけたい。

社会福祉実践活動論というものがいるとするならば、人を集め、その考えを集め、そして、その共感、共働を通して、自己開発を行ない、自己実現というものをお互にすすめ合って福祉社会を形成していくこうと考えます。

皆々 様に 支えられて

感謝のご芳名

☆ご寄付をいただいた方

平成七年度（平成七年四月より
平成八年三月）、本部及び各事業
所に金品のご寄付をいただいた方々の
ご芳名を掲載させていただきま
した。衷心より感謝申し上げる次
第です。なお、年二回のバザーの
開催に際しても、多大の方々のご
協力をいただいておりますが、紙
面の都合上とても掲載しきれませ
んでした。どうかご了承ください。

網川省三様、小林秀一様、宮内章
様、浜園利夫様、湯浅正様、小山
悦夫様、柴田昭二様、中西健一様、
高田篤子様、土谷新様、ひかりの
ガレージセール様、時永康夫様、
鈴木豊子様、横溝四郎様、武居工
務店様、瑞穂工業技研研究所様、
大山勝也様、池上嘉信様、早瀬進
様、村田操様、島野恵様、原京子
様、株育心会様、村岡精一様、片
桐一平様、山岸敏夫様、高田昇一

★袖ヶ浦地域協力者

昨年度の袖ヶ浦地域でのボランティアの方々、利用者の雇用や実

子どもの生活研究所改築基金
ご協力有り難うございました

(平成七年四月一日)

平成八年三月三日

湯浅正様 松尾実様

賀戸文彦様、浜園利夫様、中西健

一様、黒林正様、(株)エルローズ様

池上嘉信様、早瀬進様、松井吉平

様、村田操様、村岡精一様、片桐

一平様、花村幸一様、持田才子様

卷之二

★袖ヶ浦地域協力者

坂石油様、根形自動車様、黒木照子様、新谷多恵子様、加藤義明様、池田久司様、比和野京子様、野里公文塾土屋様、齊藤とも子様、三浦トヨ子様、松崎きみ子様、藏波小学校様、トヨー施工様、新双葉土木様、カントリーファーム様、山中はつね様、遠藤様、小杉様、鵜野様、武井様、セブンイレブンさつき台店様、同長浦店様、ミニストップ長浦店様、スリーエフ長浦店様、袖ヶ浦駅キオスク様、鳥海商店様、松本一男様、鳥海一男様、渡辺義一様、黒川孝雄様、仲由夫様、遠藤隆吉様、清田様、平野米穀店様、かね坂水産様、篠原木材様、大橋屋豆腐店様、水谷商店様、東京ガス木更津営業所様、グ職員様、EMの会長竹則子様、袖ヶ浦ロータリークラブ様、日栄産業様、安藤範彦様、JR長浦駅様、日本道路公团習志野パークイン田中内科医院様、佐野内科医院様、古川皮膚科医院様、加藤歯科医院様、袖ヶ浦病院様、さつき台病院様、君津中央病院様、田部整形外科医院様、長浦眼科クリニック様、Kenクリニック様、小関耳鼻科医院様、千葉袖ヶ浦福祉センター、歯科様、山田眼科クリニック様

ひかりのタイムス

独立第28号

ひかりのタイムスは、嬉泉広報責任者の友田氏がアドバイザーで、利用者の山岸が編集長をしています。

ダイエーの仕事を通して自分を見詰める(その2)

山岸 裕

消費者にアピールする場合は「ブランド」も安売りの記号として使われる。改めて日本人は「ブランド好き」であるという事を感じた。ロゴ入り広告を打つ度にそう思う。

ちなみに私はブランド商品には興味もなく入社時に買ったブランド入りハンカチも実用的に使っている。

く事が多い。

やる仕事は、売り場の整理、ト ラックから運んだ冷凍食品、パン等を売り場に陳列する。POP関係の取り付けをする。懶の整理をする。レジの籠の整理。中には野菜の包装。惣菜の包装もした。焼き鳥にタレをかける仕事は不器用で出来なかつた。

人間関係はどうしている???

人間関係は隣の売り場が青果の作業場で、そのパートの人達が好意的であった事が現時点ではよかつた。従業員食堂で会話を少しは出来るようになつた。ただ従業員同志の複数の会話にはまだ慣れてない。ただ私は今まで障害児の親と接した事が多い。今回ダイエーで仕事していく、子供の進学に話題の花を咲かせる親がいるという事を知った。この世の中に障害児の花を咲かせる親がいるという事を知つた。

ダイエーの仕事の値段票打ちは仕事がセールの準備で多い時がある。と同時に棚卸しの前後は値段票の申請が各売り場からい時は自分の直属の責任者か、課長に聞

親のように極端な話死ぬまで子供とつきあい続ける親と違い、子供が大学進学、就職していけば子供の付き合いが終わる期限付きの親がいるという事を私は知つた。ただ職場だけで人間関係が完結するのは、好きではない。それ以外の趣味の場でも人間関係を広げたいものだ。

お金の使い方

さてそうして稼いだ給料がどういうのに使うべきか。まずはつきりしてるのは株等のギャンブルでハイリスク・ハイリターンの一発当たるといが、はずれるとスッテンテンになる危険性の高い物にお金は使わない。借金をしょってそれに振り回されて働くのだけはまっぴらだ。借金を伴う危険性のある物(サラ金・クレジットカード)も同様。堅実で安定したお金の使い方を心掛けたいものだ。

ダイエーに入つて幸せか??

課長からダイエーに入つて幸せですかと聞かれた。つらつらに思ふと即答出来ない。幸せである部分と、幸せでない部分がねじれて交錯している。

ダイエーに入つて幸せかどうかの評価は、棺を覆うて決まる。偉大な釈尊や、日蓮大聖人様のような高い功德を積まれた聖人が大学進学、就職していけば子供の付き合いが終わる期限付きの親なら幸せかどうかの判定をされるだろう。私如きが決める事ではない。これからの中も、自分自身の行動と心に潜む魔(自分の中に潜む弱さや、甘え)との戦いが決めるだろう。はつきりしているのはダイエーで仕事をしている事が「人間革命」の扉を開けたという事だ。それは果てしなく永遠に続くといふ事だ。苦難があつても日蓮大聖人様が温かく見守る事だらう。こんな私でも大聖人様の慈悲と愛と厳しい励ましで気付いた事も多い。(1)親はいつまでも生きている分けではない。自分がしっかりとしなくてはいけない。(2)自分の責任で全ての物事はある。心に潜む魔を克服してこそ自分が変わり世の中が変わるという事。これらを通して自分がいかに甘かったかを痛感した。大聖人様の厳しい教えを元にこれから真面目に生きていこうと思う。例えると突然人類が絶滅していく事になつたとしても……

(了)

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)